

草津温泉一泊の旅 2019



2019年7月

旅のチカラ研究所 植木圭二

梅雨時期の真ん中の週末、群馬県の草津温泉に一泊旅行に車で行ってきた。私が勤めていた会社の仲間たちとワンボックスカーに乗っての旅は、私にとっては旅行者というよりも添乗員と化していたが、それもまた良い経験になった。

第一章 途中を楽しむ

■白井宿

今回の草津旅行は私が定年の時に勤務していた職場の仲間で OB もいれば現役もいる。定年しても年に何回か飲み会をやっているのだから、今回は思い切って温泉旅行に行ってみようということになり、6人のおじさんたちが1台の車に乗って草津温泉に向かっている。

車は今、関越自動車道を北上している。私は後ろの席に乗っているだけで運転手は来年定年退職を迎えるツーさんだ。

渋川伊香保 IC で高速道路を降り群馬県渋川市の道の駅「こもち」に車を止め、道の駅の裏手にある白井宿という宿場町を散策する。白井宿は鎌倉時代に白井城の築城によってその城下町として発展した。この地域は吾妻川と利根川が合流し街道が交差する交通の要衝で軍事拠点ともなっており戦国時代には上杉、北条、武田といった有名大名たちにより白井城を巡り攻防戦が繰り返され、江戸時代以降も江戸と越後を結ぶ三国街道の宿場町として栄えた。

現在の白井宿は、古い街並みを残しながらひっそりと人々が生活を営んでいる。街の真ん中に小さな川が勢いよく流れており、川に沿って両側に車道、その外側に古い家々が連なって1kmくらい続いている。川の淵には紫陽花が見事に咲いている。

街並みを見ていると昔は随分繁栄したのだろうとを感じるが、私たちが立ち寄った時間帯は数人の観光客と会うだけで住民とは会うことはなかった。土産物屋や商店がある訳ではないので多くの人に訪れて欲しいという必要性はないのだろう。

観光地化されている有名な旧宿場町とはひと味違う“ひっそり感”が魅力的だ。



■ 四万温泉に向けて

いよいよ草津温泉が近づいてきたので、企画担当兼添乗員役の私は車の中で草津温泉の魅力を話始める。草津の湯は強酸性でその強力な殺菌力のために草津温泉で治らないのは恋の病だけだなどと草津温泉の凄さを力説する。

その刺激的な草津温泉で湯治して帰る時に立ち寄るのが四万温泉で、その柔らかい泉質が肌に優しいので草津の“直し湯”としても四万温泉が重宝されたと事前説明をすると車内のおじさんたちは感心して聞いてくれる。

その四万温泉には「積善館」という有名な宿があり、宮崎駿のアニメ映画「千と千尋の神隠し」のモデルになったと言われている宿で宮崎駿も泊まったことがあると事前情報を話す。もっとも宮崎駿本人は何処をモデルにしたと明言していないので各地で勝手に名乗っているのが実態で、四国の道後温泉や台湾の九份（きゅうふん）などもモデルになったと自ら宣伝していると付け加える。

聴いているメンバーの反応は上々、それを喜びに変えて私は自分の話に半分酔いながら添乗員とはこんな感覚なのだろうと感じ始める。

車が四万温泉に入る少し手前の道路にはメロディラインが敷設されている。メロディラインとは、例えば時速 40km の一定速度で車が走行するとタイヤと路面の摩擦音が音楽になって聞こえるという優れたもので最近国内各地で見うけられる。

このメロディラインを発案施工している会社の人インタビューを聞いたことがあり「お陰様で忙しくてしょうがないが、この道路が交通安全に役立つとお褒めの言葉をいただくのが非常に嬉しい」と語っていた。それはその区間だけでも法定速度の時速 40km で走行するので事故が少なくなるという訳である。仕事と社会貢献、そして儲かるという理想的なビジネスモデルになっていることに私は感心したことを思い出し皆に伝える。一同は納得している。

「さあ、皆さん聞いて下さいよ。ツーさん、時速 40km ですよ」と添乗員の私が呼び掛けて、千と千尋の神隠しのテーマ音楽「いつも何度でも」が路面から伝わって車内に流れる。

■積善館

四万温泉に到着して早速「積善館」に行く。宿の前には赤い橋があって映画の中で出てきたあの「油屋」のような建物が建っている。既に先客が 10 人ほど写真撮影待ちで並んでいる。

立ち寄り湯をするために入浴券を購入して中に入る。風呂は「元禄の湯」と呼ばれるタイル張りの大正ロマンを感じさせるもので、湯船が 5 つあるとても独創的なものだ。私はこの雰囲気と優しい泉質のお湯が好きで宿泊も含め過去数えきれないほど訪れている。

風呂を堪能し古い建物内部の見学ツアーに“ご一行様”を案内する。この建物は重要文化財になっており火が使えないので厨房がなく、宿泊のお客には弁当が提供される。そんな話をすると皆がうなずいてくれる。いや、勝手に歩き回って聞いていない人もいる。5 人にしてこうなのだから、30 人くらい先導するバスツアーなどはどうなるのだろうかなどと心配しつつも、私は得意になってさらに奥のトンネルへと案内する。

どうして建物の中にトンネルがあるのか。

それはこの古い建物のすぐ背後まで裏山が迫っており、建物の前は川なので増築の余地がない。そこで裏山の上に新しく建物を建て、新旧の建物を結ぶためにトンネルを掘った。トンネルを新しい建物の真下まで掘り、そこから縦にエレベータを通した。従って新しい建物に行くためにはトンネルを抜けてエレベータで登ることになる。新しくといっても昭和の時代のことで、少なくとも千と千尋の映画よりは古い。

宮崎駿がこの宿に泊まった時にはこのトンネルは既にあり、彼は上の新しい建物に泊まったのでエレベータで降りてトンネルを抜けると古い重要文化財のレトロな建物に出る。よって映画の最初のトンネルを抜けるシーンに繋がることになる。

そんなことを話すと、一同は感心している。私は添乗員とは結構面白いものだとも感じてしまう。



■焼きまんじゅう

積善館を後にして古い温泉街を歩いていくと、半分くらいはシャッターが降りている街並みの中に上州名物の焼きまんじゅうの店「島村」がある。おぼさんが炭火で焼いてその場で食べさせてくれる店で、この店に立ち寄った数々のテレビタレントや有名人の写真が処せましと飾ってある。



焼きまんじゅうは昔からある群馬県民の“おやつ”だが、最近ではB級グルメで認知度が上がってきており、アンコが入っていない酒まんじゅうを串にさして甘味噌だれを付けて焼いたものだ。味噌を焼いた香ばしさと柔らかい酒まんじゅうの組み合わせがなかなかうまい。群馬県出身の私にとっては珍しいものではないが、同行したメンバーは初めて食べるらしく美味しく食べている。

■ハッ場ダム

草津に行く途中に建設中のハッ場ダムがある。ハッ場を「やんば」とは地元民でもなければ通常は読めないが、2009年の民主党政権発足時にこのダムの建設中止がニュースになったので名前が全国的に広がった。

一時は中断していた工事だがその後再開されて、現在は完成間近で水を溜める直前のところまで来ている。水を溜めれば見ることが出来ないダムの内側は今だからそこ見物の価値があるだろうと展望台も用意されており、国土交通省の主催でダム見学ツアーなるものが無料で開催されている。このダムには今も国が気を使っていることがうかがえる。

このダムの堤高は116m、高さでは日本のダムの48番目で決して特出したものではなく、構造的にもコンクリートの自重で水圧に耐える重力式ダムと呼ばれる一般的なものである。

堤高で日本最高は黒部ダムの186mで、黒部ダムはアーチ式ダムと呼ばれ独特なフォルムをしている。それは堤防が弓を引いた形でダム湖側に膨らんでいるので水圧を左右の陸地に逃がす構造になっており技術的にはその弓の角度が難しいが、その反面芸術的な美しい形状になっている。同じ群馬県のみなかみ町は“ダムの町”と呼ばれており、アーチ式ダムやロックフィルダムなど各種そろっている。世の中にはダムマニアも多いので、そちらもお勧めですよとおじさん一同にも伝えるが、あまりダムに興味がないらしい。

ハッ場ダムは山の険しいところに造るダムではないのでダム本体よりもその地域一帯を作り変えていることが特徴だ。

このダムを造るために多くの家や道路、JRの駅や線路まで移転させている。究極は河原湯温泉という温泉地全体も移転させている。その河原湯温泉旅館群は上流の高台に移転して既に営業しており、その横を車で通過するが新興住宅地のような温泉街になっている。

車の中からは「これが温泉街？」という声が聞こえる。この温泉に浸かって温泉客は何を感じるのだろうか。

このダム一帯は人類が自然に対して闘いを挑んでいるかのように私には見える。分野は異なるが技術者だった私には応援したい気持ちもあれば、こんなに作り変えてよいのかという恐れ多い気持ちもある。その性質や規模からすれば「作り変える」ではなく「造り替える」と書く方がいいかもしれない。地球が造った土地・景観にとって代わるものを造ろうとしている。

とにかくこの一帯は全く異なるものに生まれ変わろうとしている。

第二章 草津温泉で過ごす

■湯畑

草津温泉手前の道路で再びメロディラインが敷設されている。音楽は「草津良いとこ一度はおいで・・・」というあの有名な「草津節」だ。

草津節の歓迎を受けて草津の温泉街に入り、宿に車を置いて早速私たちは草津の街の散策に出掛ける。昔から草津温泉の中心は湯畑で、この湯畑を中心に飲食店や土産物店が連なり、足湯や共同浴場などの湯めぐりもできる。人々は湯畑に集まり湯畑を中心に活気が溢れている。



一方でさびれた温泉地では、大型ホテルができるとう収益を上げるためにホテル内に飲食店や売店、アミューズメントなど全てを用意する。そのために宿泊客はホテルから出ないで済んでしまい、やがて温泉街を人が歩かなくなり、温泉街全体に活気や魅力がなくなる。その結果、大型ホテルにも宿泊客が来なくなる。このパターンの温泉地は多い。

草津温泉がそうはならなかった理由は湯畑に観光客が集まるからだろう。

湯畑は草津の泉質主義を貫くためのもので、強酸性の高温の湯を水で薄めることなく冷ます方法として湯を外気にさらして木製の階段を徐々に流すことで温度を下げている。泉質を維持しつつ高温の湯を入浴可能な温度にするために生まれた知恵だ。

それにしてもこれを湯畑と名付けたことが、私には驚きで名付け親には絶大な敬意を払いたい。

湯畑を現在のひょうたん型にして周囲に柵や歩道を配し人々が集まれるようにデザインしたのは芸術家の岡本太郎だ。その彼の思いを記した碑文が湯畑の一角にある。

湯畑の周りの柵には草津温泉を訪れた戦国大名、政治家、芸術家、俳優などたくさんの著名人の名前が刻まれている。その中に最も新しく珍しい名前を発見した。その名は「ルシウス・モデストゥス」、肩書はテルマエ設計技師で古代ローマ人だ。映画「テルマエ・ロマエⅡ」で阿部寛演じる主人公のルシウスがタイムスリップして草津に現れたことにより刻まれたもので、その遊び心が実に楽しい。



■若者が多い

本日は梅雨時で雨模様の土曜日だが、多くの観光客が訪れている。その観光客の特徴はというと若者が多いということだろう。その若者たちによって街は活気に溢れていると感じられる。

草津と並ぶ観光地の箱根は首都圏に近いこともあって多くの外国人が訪れるのが特徴であるが、この草津の特徴は若い人が多く訪れることだろう。もちろん年配者もいるが若いカップルを中心に若い女の子も多い。おっと、一応若い男たちも目に留まる。

温泉というと年配者のイメージがあり、午前中に訪れていた四万温泉も年配者が多かった。草津温泉はそのイメージを払拭するかの如く、多くの若者が目につく。

同行のおじさんたちメンバーもこの光景には驚いている。そもそも私を含め彼らは若いカップルや女の子と接する機会が少ないので別世界のように感じているのだろう。何やら目がキラキラ輝きウキウキしているように感じ取れる。

私かというと湯畑をバックに写真を撮りしている若者たち、それも若い可愛い女の子を中心に「シャッター押してあげましょうか？」などと声を掛ける親切おじさんを演じている。ついでに岡本太郎の話やルシウスのネームプレートのことも教えて、人助けと言いながら添乗員気取りでいる自分に気が付く。

何故こんなに若者が集まるのか。正直私にもよく分からない。

それでも考えられることをいくつかあげれば、まずはその圧倒的な温泉パワーで若い女性温泉ファンが増加、それも本物の温泉を求める女性ファンの急増が若い男も増やしている。そして夏は避暑、冬はスキーなど春夏秋冬いつでも楽しめること。さらに B&B (Bed and Breakfast : 朝食のみ提供する宿) などの安く泊まれる若者向けの宿が増えている。それらの情報がテレビ、雑誌、インターネットで広がったことだろう。

そういえば私が頻繁に訪れて情報をもらっている旅館組合の職員の若い女の子を知っているが、今回湯畑近くの光泉寺の階段で片付け作業をする彼女と偶然に出くわした。彼女にどうしてここでそんなことをしているのか聞くと彼女は「さっきまで私たちが主催したイベントがあったのですよ」と明るい笑顔で答えていた。

街で働く人たちも若者が多い、若者の感性で街が作られ運営されている。

■振る舞い商売

湯畑近くには店が多いが、その中でも焼鳥屋が何故か人気がある。焼鳥を買うために 20 人くらいの人たちが並んでいる。

そこから程近いところに玉屋商店という酒屋があって、店の前には無料で試飲させてくれるテーブルが出されている。この場所に群馬県内あるいは隣の造り酒屋がやってきて試飲販売をしている。私はよくここで試飲させてもらうのだが、本日は地ビール、焼酎、日本酒の 3 店舗が出店している。

ここは盛り上げに徹した方が売っている彼らも喜ぶに違いないと勝手に考えて、冷やかし半分で何処から来たのかとか話しながら試飲させてもらう。どの店の人も明るく元気な声で応対してくれる。私たちもそれに応えて、ちょっと一杯ではなく“いっぱい”飲ませてもらう。

湯畑から西の河原公園に行く途中にまんじゅう屋が何店舗もあり、どの店でも試食させてくれる。その中でも最も積極的なのが長寿店という店で、常時 3 人が道に出てまんじゅうとお茶を配っている。まんじゅうは常に暖かい蒸かしたてのもので道に行く観光客一人ひとりに声を掛けてお盆にたくさん乗せたまんじゅうを差し出す。その光景は言わばこの界隈の名物になっている。

同行のメンバーはまんじゅう一個を積極的に試食させるという商売スタイルに非常に驚いて感激している。「まんじゅう怖い」と言いながらもらって食べている。余程気に入ったのだろう反対側にある別の店でさらにもう一個もらっている輩もいる。

西の河原公園からの帰り道でもまたもらって食べているのは、今回の幹事役の松ちゃんだ。よほどまんじゅうが怖いのだろう。

■日新館

本日の宿泊は湯畑のすぐ近くの「日新館」という老舗宿である。草津は湯畑を中心に栄えたので湯畑の近くの宿はみな歴史がある。この日新館も 300 年以上前から営業していたということで、当時は湯畑からの直接湯を引いて使用していたという数少ない宿だ。

この宿の特徴は湯畑に近いことはもちろんのこと、17.5畳という大きな部屋があることだろう。今回のようなおじさん6人旅だと普通は2部屋に分かれてしまうところだが、合宿のような旅なのでこの大きな部屋に皆で泊まれるのは大変ありがたい。

この宿にはこの大きな部屋以外は8~10畳の部屋が10室あるだけで比較的にじんまりしている。サービスも昔ながらのおもてなしで、古き良き温泉旅館を楽しむなら良いかも知れない。

草津温泉の最近の宿のトレンドは若者や外国人をターゲットにした素泊まりや朝食のみ提供するB&Bスタイルの宿だ。夕食の提供がないため費用も抑えられている。

草津の湯畑周辺は食事処、飲み屋が多く、コンビニエンスストアもある。お客は自分たちが食べたいものを多くの選択肢から選ぶことが出来る。最近はその食事処も味で勝負するグルメ志向のお洒落な店が多くなってきている。草津が若者に人気があるもう一つの理由かもしれない。

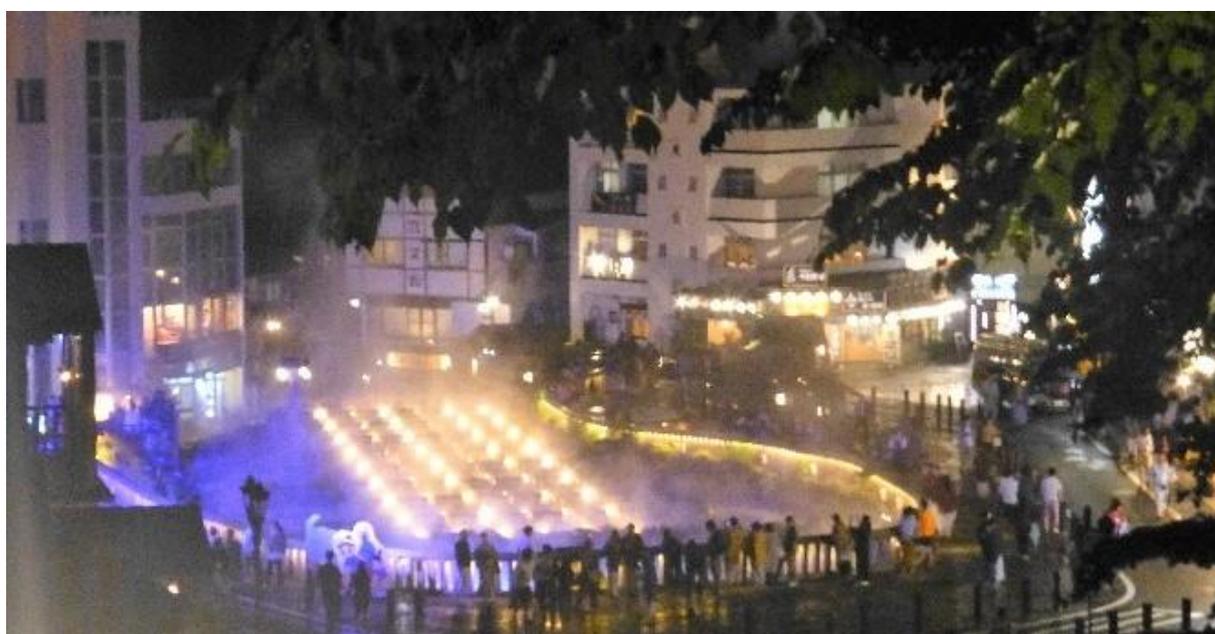
■夜の湯畑

夕食後に夜の草津を楽しむために湯畑周辺の散策に繰り出す。湯畑はライトアップされて昼間とは全く別な顔になっている。

浴衣を着て下駄でかっぱすると、いかにも温泉地という雰囲気がして日本の温泉文化の醍醐味を感じる。周囲を見渡すとその醍醐味を味わっている人たちばかりで、特に若い女の子の浴衣姿というのがこの上ない。京都あたりでは浴衣姿のほとんどは外国人であるが、ここ草津は圧倒的に日本人だ。それも観光用浴衣ではなく宿の浴衣、つまり寝間着なので色っぽさが一段と増しているから中年おじさんたちにはたまらない。

湯畑を上から照らすライトアップ用の照明は赤や青に変化している。温泉の湯気が時折その照明を遮るように湧き上がってくる。その湯気を避けるようにして人々は写真を撮っている。

湯畑のすぐ近くの高台にある光泉寺に行く階段を数十段登ると湯畑を上から見る事が出来る。赤や青のライトによって湯畑が湯気の中から浮かび上がってくる光景はとても幻想的だ。



■草津温泉は万病に効く

「草津温泉は万病に効く、治らないのは恋の病だけ」と古くからいわれている。理由は強酸性なので殺菌力が強いことで、酸性度を表す水素イオン濃度 PH は草津温泉では 1.8 くらい。中性は 7 で、数字が小さくなるほど酸性度が強くなり、人間の胃液は 3~4 なので 1.8 は相当に凄い。五寸釘を草津の湯に浸けておくと 10 日間で無く程で。それほど殺菌力が強く外傷に効く。

この源泉の泉質を維持するために草津温泉では泉質主義を貫いている。それほどこの宿でも共同浴場でも、湯が熱いからといって決して水で薄めることはしない。湯畑のところでも述べたが、湯畑の構造は高温の湯を冷ますための昔からの工夫の結果である。ついでに言うとそれでも適温にならないので湯もみをして冷ましている。それらが名物になっているから面白い。

草津温泉は高温で自噴湧出量日本一という豊富な湯量なので、当然源泉かけ流しになっている。

世間には源泉かけ流しにこだわる人がいるが、水で薄めてかけ流しにしてもあまり意味がない。温泉成分がたいしたことなければ（失礼！）なおさらだ。

日本の温泉法では成分か温度どちらかの条件を満たせば温泉を名乗れる。温度については 25°C 以上なのでいわゆる単純泉でも温度だけ満足した温泉では自宅の風呂と何も変わらない。

■西の河原大露天風呂

西の河原公園の大露天風呂に行く。私もいろいろな露天風呂に入っているが、西の河原大露天風呂が日本で一番大きいと思う。

日本で一番としたのはアイスランドのブルーラグーンという温泉の露天風呂の方が大きい、確か 50m プールが 4 個分くらいだった。こちらの草津の露天風呂は男女合わせて 500 m²と書いてあり、公式の 50m プールは 50m×25m なのでブルーラグーンの 1/8 か。



上の写真は西の河原大露天風呂の男湯のものだが、さすがに写真撮影はできなかったので公式サイトのものを使わせてもらう。

ついでに左の写真は 3 年前に行ったブルーラグーンのものだ。日本と世界のスケールは一桁違う。やはり日本はそのスケールよりも“質”で勝負するべきなのだろう。

さて、その日本一の露天風呂に 50 人くらいが入浴している。もちろんこども若者が多い。早速私たちも入浴する。

この露天風呂の良いところは、源泉の流出口付近は温度が高いがそこから遠ざかるほど温度が低い。高温の温泉を苦手をしている者も同行メンバーにいるようなのでありがたい。

案の定、最初はみな流出口から遠い脱衣場の近くにたむろしている。ところが次第に慣れてきたのだろう、徐々に流出口に近づいていく。その徐々に行く様が滑稽で面白い。

「そんな熱いのは無理」と最初は言っていたが、それが「あっちの方はどうだろう」となってきた、さらに「もう少し行けるかもしれない」となり、最後は「流出口付近はどうなのだろう」と変化する。人間とは変わるものである。いや、変わるから良い。

結局は流出口から程近い場所で一同は落ち着く。そして近くには外国人それも欧米人らしい若者が数人いる。外国人の多くは同性でも裸で一緒に入浴する習慣がないので珍しい光景ではあるが、最近では日本の温泉文化を好む外国人が増えてきており、草津温泉の魅力は外国人の習慣までも変えてしまうのだろう。

何処から来たかを聞くとニューヨーク、そしてケンタッキーだという返事が返ってくる。草津温泉そしてこの露天風呂の感想を聞くとワンダフルの一語で、緑の中での入浴は最高だと言っている。確かにまぶしい新緑に包まれて広く開放的な露天風呂は素晴らしい、温泉の効能含めて視覚や肌で感じる空気もたまらない。

私は草津温泉が地元ではないが、なんだか草津温泉を紹介できることに嬉しくなっている自分に気が付く。添乗員とはこんな気持ちになるのだろうか。

■温泉巡り

この宿は湯畑から近いので湯畑源泉を引いている。草津温泉には 6 つの源泉があり、湯畑源泉は古くからあって人気が高い。八代将軍徳川吉宗に献上したという湯もこの湯畑源泉で湯畑の中にその記念碑が建っている。この源泉は肌触りとか柔らかさが何となく違うように私には感じる。

宿の内湯は熱くもなく温くもないちょうどいい温度になっている。露天風呂はやや熱めの設定になっているのもありがたい。

湯殿は木で造られて天井は合掌造りのようになっており、上に換気用の窓が横に開いている。泉質だけでなく全体的な安心感のようなものを感じさせてくれる。気持ちが和らぐというのはこういうのを言うのだろう。

翌朝の早い時間に私は目を覚ました。ツ一さんと松ちゃんも起きていたので 2 人を誘って共同浴場巡りに出掛ける。あとのメンバーには申し訳ないが昨夜の酒のせいだろうか熟睡しており、起こすのは忍びないのでそのままにしておく。

まずは煮川源泉の共同浴場に行く。既に地元の人が入っており、私は軽く挨拶をして湯船に浸かろうとするが、これがなかなか熱くて手ごわい。人間温度計を自認する私の感覚では 45℃くら

いだ。それでも添乗員の私が入らないのでは手本にならないと根性と気合で何とか入る。そしてツーさんも入ってくるが、彼はあまり根性も気合も入れていないようだ。最後に松ちゃんは足を湯に浸けただけでギブアップ。「かけ湯だけで勘弁してほしい」と言って少しずつ汲んではかけ湯をしているが、それでも熱そうだ。

そんな光景を見ていた地元の人が話かけてくる。「宿の風呂は熱交換や汲み置きをして適温にしているけど、ここは熱いでしょう」と言ってくれるが、水でうめていいよとは言わない。

さらに「時間湯とかで熱い湯に入ると効能があるようなことを言う人がいるけど、あれは嘘だよ。良薬口に苦しの発想だ」とも言ってくれる。そんな彼の熱弁を聞いていたが、私の根性も気合も限界になっており一時避難で湯船から出る。それでも彼の話は続く。草津の人は温泉については思うところがあることはよく理解できたが、決して水を入れてもいいよとは言わない。

次は共同浴場「千代の湯」に行く。たった今出てきた人に温度を聞くと「少しぬるいくらいでちょうどいい」と返ってくる。以前来た時はものすごく熱かった記憶があるが今日は確かに熱くない。先ほどの煮川の湯に比べればはるかに入り易い。恐らく 41℃くらいだろう。松ちゃんも喜んで湯に浸かる。

草津に住んでいれば朝早くからこんないい湯に毎日入れるのかと、3人で貸切り状態の共同浴場を楽しむ。

千代の湯は、宿の近くなので源泉は湯畑源泉を使用している。昨日入った西の河原の大露天風呂は西の河原源泉ではなく、温度が一番高く湧出量の多い万代鉍源泉だった。今回の旅行では3源泉を堪能したことになる。

第三章 帰路も楽しむ

■品木ダム

草津温泉の近くに品木ダムという面白いダムがある。ダム本体は堤高 44m の重力式ダムで特出したものではないが、ダム湖では凄いことをやっている。



草津温泉は強い酸性の湯で、草津だけでなくこの付近一帯の川はみな強い酸性になっているので堰き止められたダム湖の色は温泉のような乳白色がかった緑色になっている。

強酸性は温泉としては良いが、農業用や工業用にはとても利用できない。このまま強酸性の水を下流に流すと飲料水はおろか下流域の農業には害を及ぼし、魚も住めない。

それでこのダムでは酸性の水を中和する作業をしている。中和のためにアルカリ性の石灰を投入して、沈殿物が残るので湖底の沈殿物を重機ですくって排出している。

こんな凄いことをしていることをしているお陰で、草津温泉を堪能することが出来るのか。我々は最敬礼して品木ダムを後にする。

■太子（おおし） 駅跡

太子駅跡という歴史名所があり見学に立ち寄る。廃線や〇〇跡というのが私たちおじさんたちには何故か共鳴するものがある。

かつて草津町の隣の山の奥に群馬鉄山という鉄鉱石出現場があった。第二次世界大戦末期に鉄鉱石を京浜地域に輸送するため太子線という鉄道を開通させ、その積み出し駅が太子駅である。群馬鉄山から太子駅までは空中ケーブルにより鉄鉱石が運搬されという。

残念ながら開通が大戦末期だったのでほとんど利用されずに終戦を迎えた。戦後は旅客輸送も行われたが 1971 年に廃線となり、現在の太子駅はホームやレール、鉄鉱石積込設備（ホッパ）の基礎部分が残されている。復元された駅舎も含め、実に独特の趣がある。

この駅の跡を見て思うことは、人間と鉄、鉄道の力、発展と衰退というものだろう。

そういうこの土地や線路の歴史を旅は教えてくれる。



■牧野酒造

だいぶ以前の本で「群馬の逆襲」という本を読んだことがある。

不人気県の群馬県でも良いところもあるから県民は希望を持って欲しいという主旨の本で、この中で「牧野酒造」という高崎市倉賀野の造り酒屋をお勧めの酒屋だと太鼓判を押していたので以前一度立ち寄ったことがあり、今回も酒好きのメンバーのために立ち寄る。

この店の酒は「大盃」というブランドだが、店主のこだわりからかあまり市中には出回っていない。ただ品評会に出して多くの賞をもらっている。

店主は本日留守だというので女将さんが対応してくれる。対応と言っても好きに試飲してくださいと試飲用のカップを渡され、10本くらいの酒ビンから私たちは好きに飲み始める。

群馬の酒をあまり勧めない私もここの酒はお勧めである。

■こんにやくパーク

群馬県の名物を蒟蒻（こんにやく）と答える人は少ないが、蒟蒻芋の生産は日本でシェアは9割以上ある。そんな群馬県の甘楽町にある蒟蒻をテーマにした「こんにやくパーク」に立ち寄る。

ここには過去何回か訪れているが、明らかに入場者数が増えている。大型バス 10 台以上、自家用車も数百台も来ている。私も驚いているが同行メンバーたちはもっと驚いている。何しろ蒟蒻のイメージは地味なので小規模なものを想像していたらしい。その地味な蒟蒻の文化と美味しさを伝えるために製造ライン見学や各種蒟蒻料理の試食バイキング、手作り体験など出来る。

何と言っても入場料も試食バイキングも無料なのありがたい。このテーマパークは何で儲けているのか不思議なくらいだ。



今回の私たちの目的はもちろん試食バイキングだ。蒟蒻料理といっても田楽や玉こんにゃくだけでなくラーメン、焼きそば、カレー、うどん、デザートとバリエーションも豊富で、何よりも低カロリーというのが魅力だ。

我らおじさんたちはカロリーもお金も気にせずに十数種類の蒟蒻料理を味わう。

ここは誰を連れて来ても評判がいい。近くにある世界遺産の富岡製糸場を上回る人気ぶりで、この地域のお勧めの施設になりつつある。旅行会社のバスツアーが多いのは、立ち寄る費用が掛からないのとお客の満足度が高いからだ。

それにしても本当に多くの人がこんにゃくの土産物をたくさん買い込んでいる。何で儲けているかは一目瞭然だ。

しかしそれよりも蒟蒻の認知度が上がるのが最大の効果だろう。

■旅の記録

実施は 2019 年 7 月 6 日（土）～7 日（日）、費用は一人当たり約 20800 円になった。そのうち交通費は 6 人分で 13910 円、一人当たりでは約 2300 円だった。そして一人当たりの宿泊費は 14550 円だった。以下 6 人分の詳細費用を記す。

関越高速道路往復、第三京浜往復	5510 円
ガソリン代（走行距離 460 k m）	8400 円
日新館宿泊費（6 人分、ビール 3 本含む）	87300 円
持ち込みの酒、つまみ類	4800 円
焼きまんじゅう 2 本	600 円
西の河原露天風呂（6 人分、割引あり）	3120 円
太子駅跡入場料（6 人分）	1200 円
積善館日帰り入浴（6 人分、昼食込み）	8400 円
こんにゃくパーク入場料	無料